

学 長 挨拶

学 長
西澤 潤一

こういう言葉がある。「普通の教育者はただしゃべる。ちょっと優れた教育者は理解させようと務める。さらに優れた教師は自らやって見せる。そして最高の教師は心に火を点ける。」と。

今の教育は、まず普及に務めることになったから、自らただしゃべることになってしまった。チンパンジーの教育にも使われるCAIでは、意味など考えて答を出そうなどとしたら時間がかかって全問に答を書くことは難しい。考える時間を節約するような予め答を暗記しておいて反射的に答を出すよう指導が塾などではなされており、物事の意味合いや理屈を考えなくなってしまった。

この結果出てくるのは、創造する能力の低落である。ところが、日本の弱さは資源が少ないことである。わずかな資源を有効活用して、高度の製品に作り上げる以外に経済を成り立たせる方法はない。科学技術がまず筆頭であり、次いで美術工芸がある。職人芸が必要であり、他の人々の知らない科学技術を持っていなければならない。

それにも増して重要なのは、心である。その人が何を目指して自己の学識を展開していくか。今幅を効かせているのは経済である。しかし経済だけがよくなっても、人間社会にいろいろな悲劇が起ることは今日毎日のニュースを見ていただければすぐ判っていただけると思う。心を持つということが極めて大切であるということで、この傾向はますます強くなっていくことは先ず疑う余地がないであろう。戦後の進歩を見ても、世界中が物質的に驚異的進歩を遂げたことは疑う余地がないが、残念ながら心の問題については衰退を妨げることは出来ていない。一体何をすべきなのか。

このような極めて基本的な問題を、我々は共通の問題として抱えている。泊り込み寝食を共にしての議論は日常の会話よりも遥かに実りの多い結論を我々に与えてくれる。今回も同じ首都大学東京に働く皆さんが十分な話し合いを行うことによって、学生の四年間の学びの道筋、そしてそれに続くただ一度限りのかけがえのない人生への道筋をしっかりと指導していただきたいと切望するものである。

更には、これからの本学の発展のために共に歩むことを十分に考え、共に語り、共に論じ合う気風を育んでいただきたいと切に望む。

残念ながら今回は他の公務のため参加することがかなわなかったが、遠くから価値のある討議が行なわれることを切望している。

